

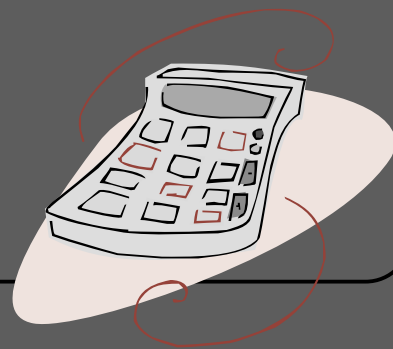
特 集



家庭の情報化

Information Technology at Home

- 情報家電の考え方
- ユーザからみた「情報」家電
- 計算機業界からの情報家電へのアプローチ
- 家電業界が考える家庭の情報化へのアプローチ
- 家庭の情報化から地域の情報化へ



編集にあたって

NECソリューションズ インターネット基盤開発本部

高島 洋典

y-takashima@bu.jp.nec.com

京都大学総合情報メディアセンター

美濃 導彦

minoh@media.kyoto-u.ac.jp

オフィスはここ十年ほどで劇的に情報化された。多くの人の名刺には電子メールアドレスが書かれているし、社内外のドキュメントの交換も一時期多用されたファックスに代わって、電子メールでやりとりすることが非常に多くなってきた。実際に仕事の効率が上がり、生産性が高まったかどうかという議論は別として、確かに仕事を進める上での環境は変化した。

一方、家庭はどうであろうか。一見すると、家庭はほとんど変化していないように思える。しかし、本当にそうであろうか？ 国内のPC世帯普及率がガス湯沸かし器を抜き、ステレオに次ぐ50.1%になった。インターネットの加入者数も4,700万人を数えるようになった。これまで電話で近況を報告しあっていた人達が、プライベートの電子メールアドレスを交換し、電子メールで連絡をとるようになっていく。

ここ数年で圧倒的な支持を取り付けた携帯電話は、単なる電話というよりも、メール端末であり、Webブラウザでもある。家庭だけとはいえないかもしれないが、家庭も含めた個人の情報環境を大いに変化させ、行動様式にも多大な影響を与えている。オフィスに比べると、「劇的」とはいえないが、家庭の情報化も確実に進んでいるといえるであろう。

さて、家庭の情報化は今後どのように進展するであろうか？ 1つのストーリーとしてゲーム機からの家庭の情報化が考えられる。これについては、本誌41巻7～9号で解説が加えられている。もう1つのアプローチが家電からの情報化である。いわゆる情報機器の範疇には入らなかった家電製品が情報化され、それらを新たなインフラストラクチャとして家庭の情報化が進むというストーリーである。

家電製品を含め、家庭にある機器が情報化され、それらがすべてホームネットワークを介して接続されれば、その有用性は高まる。この種の議論は、一昔前もホームオートメーションという形で存在した。よく引

用される例に外出先から自宅に電話をして帰宅前あらかじめ暖房のスイッチを入れたり、お風呂を沸かし始める、というものがある。一見、便利そうに見えるが、このような用途に公衆電話を探して電話をする手間や、状況の分からない家に風呂を沸かすというコマンドを送る心理的不安などの問題が指摘されてきた。

最近では、これらの問題が大きく改善されつつある。携帯電話は広く普及し、計算機の高機能化、通信回線の高速化、センサー技術の発展、画像処理、圧縮、伝送技術の進展など、さまざまな情報インフラが整備されつつある。さらに、無線技術や電力線通信の技術などホームネットワークや家庭の情報化を考える上で必須と考えられる技術が進展し、専門家でないユーザが簡単に利用できるネットワーク技術、すなわち、新たな配線や維持管理が不要で機器の接続離脱が簡単な技術が実現できる環境が整ってきた。

家庭に導入されている機器の製造開発にかかわる代表的な業界は、家電業界、コンピュータ業界、AV機器業界などである。これらの業界はこれまで自分たちの得意の分野を中心に独自の情報家電とそのネットワーク方式を提案してきた。その結果、多くの異なった視点からの提案が乱立し、情報家電に関する議論を分かりにくくしている。家電の分野は、元々日本が得意な分野であり、情報家電は計算機で失った技術開発の主導権を取り返す絶好のチャンスである。しかし、情報家電に関するこれまでの議論に、一般家庭のユーザの要望が反映されているかどうかは疑問である。

そこで、本特集では、今後の情報家電を考えるにあたって、技術的な現状の整理と研究動向、ユーザの立場からの議論を含め5件の解説記事を企画した。まずは、情報家電を考える上での一般論、原則論を述べた後、ユーザの視点からみた情報家電の議論、計算機関連の研究者からみた議論、家電、AVメーカーの立場からの議論、を続ける。これらにより、情報家電の技術動向、研究状況が把握できることを狙っている。最後に、今後の発展の方向として、家庭から地域へと広がる情報化の議論をお願いした。これらの解説が、読者諸賢が家庭の情報環境を考えるきっかけになれば幸いである。

(平成13年10月22日)